

令和 6 年度 栄東中学校入学試験問題

A日程(1月10日) 〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 監督^{かんとく}の先生の指示があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも受験番号と氏名を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で21 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問があったら、だまって手をあげて監督の先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、問題用紙と解答用紙は別々にして、監督の先生の指示にしたがって提出してください。
8. 字数指定のある問題は「、」や「。」も1字として数えるものとします。

一 次の各文の——線部を漢字に直しなさい。

- 1 シキユウご返事ください。
- 2 鎌倉時代ソウケンかまくらの寺。
- 3 不注意にキインきいんする事故。
- 4 試合がシヨウネンバむかを迎える。
- 5 お正月にネンガジヨウが届く。

二 次の(1)～(10)に当てはめるのに最も適切な言葉をあとの【語群】から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ・ 本心を(1)に打ち明けた。
- ・ クレームに対する(2)な対応にいらだつ。
- ・ 風にそよぐ(3)な柳やなぎの枝を描くえが。
- ・ 大切な客人に対し(4)なもてなしを心がける。
- ・ 先方の(5)な心づかいに感謝する。
- ・ なりふりかまわず(6)なやり方でお金をかせぐ。
- ・ (7)な小鳥のさえずりに目を覚ました。
- ・ 私としたことが(8)にもすっかり忘れていた。
- ・ けんか相手のことを(9)に言う。
- ・ 雨上がりは(10)に外に出たくなる。

【語群】

ア	たおやか	イ	かぶん	ウ	ねんごろ	エ	うかつ	オ	あこぎ
カ	そぞろ	キ	あしざま	ク	せきらら	ケ	かんまん	コ	うららか

三 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

具体的にどのようなことが起こると、自分たちの言語に消滅の危機がおしよせてきていると分かるのでしょうか？ 子供がその民族の言葉（＝母語）を話さなくなる、これが最も分かりやすい消滅のサインです。言語の危機度をうらなう重要な決め手は、話者数ではありません。子供が、母語として、その言語を習得しているかどうかなのです。

子供がその民族の言葉を話さなくなる理由は、二つあります。一つは、強国に教育の場で同化政策を施された時です。母語を話す^{ばつ}と罰せられるなどの状況下で、子供は仕方なく強国の言語を話し、結果として母語が失われていく場合です。

二つ目の理由は、大人たちが自分たちの母語を伝承する姿勢がない時です。それは、国家がバイリンガリズム（＝二言語併用）を政策として推し進めた時に起こりやすい現象です。

母語よりも、はるかに社会的に有利な言語があれば、多くの親は、後者を選びます。当面の利益に惑わされて、将来、子供がアイデンティティを失ったり、独自性を失ったりするという大きな損失には気づかないからです。親が子供に母語を教えなくなるという現象も、こうした政策の中で起こることが多いのです。

バイリンガリズムの中で、母語の使い方が不完全な若者たちが現れ始めたら、母語消滅のサインが灯っています。母語は、親から子へ自然にバトンタッチされるもの。親が自分たちの民族の言葉をいつくしみ大切にし、子供に伝えていく姿勢がなければ、その言語は消滅せざるを得ません。

国は、常に母語を優先する政策をとってこそ、程よいバイリンガリズムがでかあがるのです。

では、母語が言語的にどのような状態になった時に、消滅のサインが灯るのでしょうか？

言語学者の土田滋さん、共著を出している文化人類学者のダニエル・ネトルさんと言語学者のスザンヌ・ロメインさんの発言を参考にして、私なりに日本語にあてはめて考えてみます。

まず、①語彙が乏しくなります。語彙の中でも、名詞（例、「犬」「鳥」「米」）は残りやすいのですが、動詞（例、「添える」「とろける」）や形容詞（例、「けむい」「いまましい」）が消え始めます。具体的な物の名前は残りやすいけれど、やや抽象度の高い動詞

や形容詞は消えやすいですね。

また、語彙が少なくなっているのも、同じ意味合いを持つ語を使い分けられなくなっている、たった一語ですべてを賄おうとします。たとえば、大きさを表す時に、「大きい」の他に、「でかい足」「巨大な岩」「特大の手袋」「大規模な調査」「大がかりな仕掛け花火」など、さまざまな語があるのですが、すべて「大きい」だけで済ませるわけです。

②発音も、似ている音の区別ができなくなります。たとえば、「寂れる」。「さびれる」だったか、「さみれる」だったか分からなくなり、あいまいに発音します。「び」と「み」の発音は、似ていますからね。

③文法も簡略化して規則的なものに変わり始めます。ですから、複雑な構文を作る連体修飾部（＝名詞などの体言を修飾する語句）や連用修飾部（＝動詞などの用言を修飾する語句）は少なくなり、形容詞や形容動詞や副詞だけで済ませてしまいます。

たとえば、「私は、歯の根が合わないほどの恐怖に襲われた」という連体修飾部のある文なら、「私は、激しい恐怖に襲われた」という形容詞だけの文にして済ませるといっていいです。文の中に、もう一つの主語「歯の根が」と述語「合わない」の入った連体修飾部を含みこむ複雑な構文が作れなくなっていくのです。

④言いたいことが十分に表現できなくなります。たとえば、「彼はむっつりしていた」という表現が最も適切な場合でも、「むっつり」などの日本語特有のな表現ができなくなるのです。母語であれば、自然と身に付く言語感覚が失われていくのです。

つまり、日本語の豊かで複雑な部分が消えて、単純化され、やせ衰えていくという傾向を表します。多様性や複雑さが失われていく。これが、消滅に向かい始めたことを示す言語的なサインです。変化ではなく、日本語自体がやせ細っていくのです。

やがて、日常の話し言葉として用いられなくなり、さらに書き言葉としても使われなくなり、本当の消滅が訪れ、地球上から音もなく消えていきます。

では、完全に消滅してしまった後で、復活したという言語はあるのでしょうか？ ありません。言語学者のデイクソンさんも言い切っています、「どの言語も一度日常的に使われなくなったもので再び生き返ったためしはない」と。

ただし、細々とでも、書き言葉が残っており、その上に何らかの好条件が加われば、復活する可能性は皆無ではありません。その例は、ヘブライ語です。

西暦七〇年、ユダヤの国は、ローマ帝国に滅ぼされました。国を追われたユダヤの人たちは、現在のドイツのある地域を中心に、世界各地に散らばりました。そのため、西暦二〇〇年頃にはヘブライ語は、話し言葉としては用いられることがなくなり、日常語としては消滅とみなせる状態になりました。それでも、独自のネットワークを持ち、各地で『旧約聖書』のような権威ある文献をもとに、ヘブライ語の知識を失わないための努力が続けられていました。

一八世紀後半になると、ユダヤ教内部における啓蒙運動（「ハスカラー運動」）が起こり、ユダヤ文化復興の気運が盛り上がり、まずヘブライ語が書き言葉として広く使われるようになりました。さらに一九世紀末には、話し言葉としても復活を成し遂げたのです。なんと、約一七〇〇年間の断絶を経て、一九世紀末に近代ヨーロッパで話し言葉として復活したのでした。

そして、第二次世界大戦後の一九四八年にイスラエルが建国されて、この国の唯一の公用語になりました。なぜ、一般的にはありえない復活が可能になったのでしょうか？ 次に述べる二つの特別な条件に恵まれたからです。一つ目は、確かに話し言葉としては消滅してしまっていましたでしたが、ユダヤ教のヘブライ語聖書の典札言語として、あるいは学者の使用する文章言語として細々と生き続けていたことです。つまり、一七〇〇年間の長きにわたって書き言葉として、かろうじて命をつないでいたのです。

二つ目は、ユダヤ教という一つの宗教で結びついた民族の強い絆があり、それが政治的な信条を一つにする集団となっていたことです。これらの好条件が、世にもまれな消滅言語の復活を引き出したのです。

こうしたヘブライ語の稀有な例を除くと、一度消滅した言語が復活することはないのです。ですから、自分たちの言語を消滅させなくなかったら、消滅の兆しが見えた時に、手を打つ必要があることが分かります。

（中略）

奈良時代にはすでに、他の言語では決して真似できない短歌という独自の文学形態を生み出し、平安時代には、世界の人に読んでもらえるような巧みな心理描写を駆使した傑作を誕生させています。現代だって、日本語の特質であるオノマトペをふんだんに使っ

たコミックで、世界中の若者たちを魅了しているではありませんか。

日本人自身が、日本語に対する積極的な価値を見出し、誇りと自信を持つて守らなければ、誰も日本語を守つてはくれないのです。言語学者のデイヴィッド・ハリソンさんは、こう言い切っています。「私が確信していることはただ一点、言語が外部の人間によつて『救われる』ことはありえないということだ」。

日本人が日本語を守らなければ、日本語は消滅するのです！

そして、日本語を子供たちに喜んで教えてあげてください。日本語を存続させるためには、子供たちへのしっかりした日本語の教育こそが生命線なのです。

消滅の危機に見舞われながらも、なんとか復興の道を歩んだ言語は、いずれも幼児からの母語教育プログラムを施したことによって成功しています。たとえば、マオリ語。ニュージーランドの先住民であるマオリ族の言語です。

マオリ語は、一八六〇年頃には、西欧からの入植者や宣教師、金の探掘者や商人たちの使う英語に押されて少数者言語になってしまいました。学校教育でも西欧化を進めるために、マオリ語はカリキュラムから外されてしまい、英語学習者が増加の一途をたどりました。一九〇〇年頃にはマオリ語を話す人は激減。一九八〇年頃には、マオリの人々のうち、マオリ語を母語として話す人は人口の二〇%未満になってしまい、消滅の危機に陥ったのです。

けれども、マオリの政治家たちが、自分たちの言語の消滅の危険性を認識し始め、一九八二年には幼児期から学校に上がる前の段階まで、マオリ語を教えるプログラムを始め、その後マオリ語を教える期間をどんどん延ばし、一三歳までの教育プログラムにしました。

ついに一九八七年には、マオリ語が英語に並んでニュージーランドの公用語の一つに認定されたのです。

また、ハワイ語も同様な手法で復興させようとしています。ハワイ語は、ポリネシア系の先住民族の言語です。アメリカの英語同化政策によって、ハワイ語は消滅の瀬戸際まで追い込まれていました。

ですが、一九七〇年代には、ハワイ語を復興しようとする先住民の「ハワイ文化復興運動」が起こり、一九八〇年代には、幼児にハワイ語を使って学習させるという試みを開始。さらに年少の児童を対象とした私立のハワイ学校を開設したりして、復興に努めて

います。

これらの例から、子供たちに自分たちの民族の言葉を学ばせることが、その言語の存続の鍵になっていることが分かります。どうか、このことを意識し、子供たちに豊かな日本語を教えてあげてください。

日本語学者の金田一春彦さんは、今から三五年前にこう述べています、「日本語はだんだん影を薄くしていつて、しまいにはなくなってしまうのではないかと心配する人があるようだ。ことに近頃、英語からの外来語がふえ、また生の英語が跳梁すること、英語にとって代わられるのではないかと懸念する人があるようだ。が、これは絶対に心配はいらない」と。

私も、そう言いたい。でも、私には言えません。時代が大きく変わってきています。世界共通語の英語に押されて、日本語はもっと危険な状況にさしかかっていると思えるからです。

英語教育学者の鳥飼玖美子さんも、述べています、「英語さえできれば、という思い込みが行き渡った社会状況は、母語の軽視に繋がらないであろうか。日本語の継承が揺らぐことはないであろうか。日本語の将来は、英語を抜きには語れないことを直視せざるを得ない時代に入っている」と。

IT社会に突入してからは、英語が世界共通語になっています。そして英語を話したほうが、いや話せなければ、取り残される危険性が高くなっています。現に、日本の会社なのに、英語を社内公用語にすると明言し、実施している会社も出てきています。

アイルランドの人々が自らの意志でアイルランド語を捨てて英語にのりかえているように、日本人も自ら日本語を捨てて英語にのりかえる人が多くなる可能性があります。英語を話せなければ、世界に置いていかれるとばかりに。

そして、今や日本は小学校から英語教育を施し、中学校では英語の授業時間数が国語の時間数を超えています。政策は、「国民総バイリンガル」を目指す方向に動いています。それは、やがて、世界共通語の英語モノリンガルに連なる道なのです。

そうした動向に対して、「ちよつと待つて。この本で述べてきたようなりスクがあるのよ。本当に英語にのりかえていいの？ 独自性を持ち、人類の貴重な財産でもある日本語を捨てて？」と、あなたに問いかけたかったのです。

日本語を母語として大切にしなかった報いは、自分の拠つて立つアイデンティティを失うという形で、遠からぬ時期にやってきます。いな、刻々と日本人全体に、音もなく近づいてきています。その音なき近づきに早く気づいて、きちんと決意をしておかなければ

なりません。日本語を大切にしよう。日本語は自分を支えている言語なのだという意識をしつかり持とう。そのうえで、世界共通語を効率的に学んでいこう、と。

(山口仲美『日本語が消滅する』より)

*1 啓蒙……人々に正しい知識を与えること。

*2 典礼……定まった儀式や儀礼のこと。

*3 オノマトペ……擬声語と擬態語のこと。

*4 跳梁……好ましくないものがのさばりはびこること。

*5 モノリンガル……一つの言語しか話せない人のこと。

問一——線部1「子供がその民族の言葉(＝母語)を話さなくなる」とありますが、その理由を説明したものととして、適切なものを次からすべて選び、五十音順に記号で答えなさい。

- ア 子供にとって母語が他言語よりも有利にならない場合に、親が有利な他言語を子供に習得させようとするから。
- イ 国家がバイリンガリズム政策を推し進めた結果、自国の独自性を失い子供たちが母語を話す自信をなくすから。
- ウ 教育に関心がうすい親が増えると、自分たちの母語をいつくしみ子供たちに伝承しようとする姿勢を失うから。
- エ 他国に支配され、その国の文化や風習を取り入れざるを得なくなると、母語を使うことが許されなくなるから。
- オ 母語の使い方が不完全な若者が現れ始めると、親から子へ母語を自然にバトンタッチする際の障害となるから。

問二 ―線部2「母語が言語的にどういう状態になった時に、消滅のサインが灯るのでしょうか」とありますが、「日本語」の「言語的」な「消滅のサイン」として適切ではないものを次からすべて選び、五十音順に記号で答えなさい。

ア 名詞を軽んじて、抽象度の高い動詞や形容詞しか使わなくなる。

イ 意味が違う言葉でも、発音が似ていれば正確に区別しなくなる。

ウ 書き言葉としては使われなくなること、多様性が失われる。

エ 同じ意味合いの言葉を一語で済ませ、使い分けをしなくなる。

オ 規則的で単純な構文を使うなど、複雑な構文が作れなくなる。

問三 ―線部3「さまざまな語があるのですが、すべて『大きい』だけで済ませるわけですか」とありますが、これを「小さい」に置き換えたとき次のように説明できます。次の説明の中の a・b に当てはまる言葉をそれぞれひらがなで答えなさい。ただし a は「さ」から始まる五字の言葉、b は「お」から始まる四字の言葉とします。

・「小さい」を表す言葉は、「小さい」の他に「ちっちゃな手」、「小規模な工事」、「びびたる量」、「a 幸せ」（ひかえめなさま）、「b 子供」（年が若いこと）など、さまざまな語があります。

問四 本文中の に当てはめる言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 論理的 イ 情緒的 ウ 理想的 エ 現実的 オ 感覚的

問五 ―線部4「その例は、ヘブライ語です」とありますが、ヘブライ語が復活したのはなぜですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問六 ―線部5「同様な手法」とありますが、それはどのような手法ですか。十五字以内で答えなさい。

問七 ―線部6「日本語の継承が揺らぐことはないであろうか」とありますが、鳥飼さんのこの言葉を受けて筆者が問題視している日本の現状が、最も具体的に述べられている一文を本文中から探し、最初の五字をぬき出して答えなさい。

問八 この文章の要旨として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 日本語の話者がなくなると日本語消滅の危機に直面する可能性が出てくるので、日本人は少子化を改善すると共に、幼児期からの日本語教育に力を入れるべきである。

イ 日本の子どもたちが日本語をあまり勉強しないのは教育制度に問題があるからなので、次世代に日本語を継承するために、日本語重視の教育制度に改善するべきである。

ウ 日本語を消滅させないようにするために、日本人は日本語の独自性や価値を自ら認識し、自分たち自身の手で日本語を守っていくのだという決意をするべきである。

エ 日本語消滅のサインはすでに明確に表われているので、何年かかってもいずれは復活できるように、ヘブライ語の例を参考にして国家として対策を施すべきである。

オ これからはグローバル化がより一層進んでいくので、日本語を存続させるためには、日本語を捨てるのではなく英語も公用語にしてバイリンガルを育てるべきである。

〔四〕次の文章は、こざわたまこ「ホモ・サピエンスの相変異」(『教室のゴルディロックスゾーン』所収)の一節です。中学二年生の「私(ひかり)」は、亜梨沙、ふじもん、さーやとよく行動を共にしていましたが、ある事をきっかけに亜梨沙と仲違いをし、グループから離れてしまいます。その後、それとは別の事をきっかけにふじもと亜梨沙も仲違いをしています。本文は、ふじもんに助けを求められた「私」が、亜梨沙と話をするために家を訪ね、インターホン越しに会話をしている場面です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

「……だから、突き飛ばしたの？」

「違う！」

ひび割れた音声(おと)が、激しいノイズとなって耳に届く。

「絶対違う。あれは、ふじもんが勝手に――」

声は途中で掠れて、それ以上続かなかった。階段の踊り場で言い争いになり、追いかけてこようとするふじもんの腕を、亜梨沙が振り払った。ふじもんは階段の段差から滑り落ちて、足首を捻挫してしまった。ほとんど亜梨沙に突き飛ばされるような形で。

「……あたしは悪くない」

亜梨沙がぼそりとつぶやいた。まるで、自分に言い聞かせるみたいに。

「あたしは悪くない。……あたしは悪くない。悪く、ないもん」

その言い方に、既視感を覚えた。ああ。私はこれを、知っている。

(中略)

「……ちい、悪くないもん」

嘘を吐いているようには見えない。しかし林さんは「子どもの言うことでしょうか? 信じられない」と言いつて聞く耳をもたなかつ

た。じゃあなんで自分の子どもの言うことは信じるんだろう。そう思ったけど、もちろん言えるはずがない。

「あの子がうちの子どもの体を押したのは事実ですよ。みんな見てるんだから」

林さんは喋っているうちにヒートアップしたのか止まらなくなり「だいたいねえ」と語気を強めた。

「あなたもお姉さんなら甘やかすんじゃない。こういう時くらいちゃんと言ったらどうなの」

だって私、ほんとの家族じゃないし。そんな言葉が喉まで出かかったものの、なんとかこらえる。ちいはいつのまにかお絵かきをやめて、睨むようにこちらを見ていた。

林さんはついにしびれを切らしたらしく、もういいよ、と吐き捨てた。

「なんでもいいから、一回ちゃんと謝って」

仕方なく、「すみません」と頭を下げる。すると林さんが、あなたじゃなくてあの子、とちいを指さした。

「あの子に謝らせてよ。それが筋でしょう」

「……ちい。謝って」

ちいはそっぽを向いたまま、答えない。もどかしい気持ちで地面に膝をつき、ちいの腕をつかむ。けどちいは、頑なにそこから動こうとしなかった。

「ほら、早く。立ってってば」

ちいの腕を引っ張ろうとすると、撥ねのけられた。その手が、勢い余って私の頬をかすめる。痛つ、と声を上げると、ちいが初めてまずい、という顔をした。

「いい加減にしてよ！」

かっとして、思わず叫んでいた。

「黙ってたんじゃないよ。何か理由があったなら、それをちゃんとと言わないと。そんなんじゃないよ」

すると、ちいが突然、ううううう、と獣のような唸り声を上げた。

「……ちい?」

ううう、うううう。呻きながら、自分の拳を思い切り太ももに打ちつける。やめな、怪我するよ、と言っても聞こうとしない。言葉を発する代わりに、ちいは自分を殴った。何度も、何度も。林さんも男性職員も、呆然とした顔で私達を見つめている。

「あの。すみません、遅れてしまつて」

その声に振り返ると、父がはあはあ息を乱しながら、こちらに向かって歩いてくるところだった。

「この度は……」

父がそう言つて、林さんに頭を下げようとする。林さんがはつとしたように、父に向き直つた。

「ちよつと、あなたねえ。こっちは言いたいことが山ほどあるんですけど」

父は状況を把握しきれていないらしく、助けを求めるように私に視線を送ってきた。何を、今更。私は咄嗟に、父から目を背けてしまつた。

今頃来たつて、遅いよ。

父に向かつてそう言いかけた次の瞬間、ちいが父の姿を認めて、とととと歩き出した。ちいの顔が、みるみる涙に滲んでいくのが分かつた。最後は、うわああああん、と声を上げて父に駆け寄り、思い切り泣きじゃくつた。林さんが、ぼかんとした顔でそれを見つめていた。

「ちい？ どうした」

ちゃんと話してみろ。そう言つて頭を撫でると、ちいはうえええええん、と大粒の涙を流しながら、ちいね、ちいね、としやくりあげた。

「ちい、どん、つてしちゃつたの。タイセイ君が、お前んちのおかーさんママハハなんだろう。ママハハつていじわるなやつのことと言うんだぞつて。それでちい、どんつて……。そしたら、タイセイ君が。ごめんなさい」

ちいは父の足にしがみつき、何度も何度もごめんなさいを口にした。父はそれを聞いて頷きながら、自分の足に力いっぱいしがみついている小さな娘の声に、耳を傾け続けた。私のもとにはついぞ届くことのなかった、その声に。

「……亜梨沙は、さ。ほんとに謝りたいんじゃないの、ふじもんに」

それを聞いた亜梨沙が、心外だ、と言わんばかりに声を荒らげる。

「はあ？ なんで、あたしが。あんなやつ、マジでどうだつて——」

「ふじもんは言つてたよ。六年生の時のこと、ずっと亜梨沙に謝りたかつたつて」

亜梨沙が一瞬、何かに怯んだように声を詰まらせるのがわかつた。

——私、さつき嘘吐いた。

電話を切る直前、ふじもんは **A** でそう言つた。

——亜梨沙の気持ち、知らなかつたなんて嘘。本当は、わかつてた。亜梨沙がそのことに、気づかないふりしてくれてたのも。

なのに、私——。言葉はそこで途切れ、代わりに **B** が聞こえ始めた。嗚咽が少しずつ大きくなっていく。ふじもんは、強い人ではないのかもしれない。勇気がある人でもないのかもしれない。それでも、亜梨沙に会つてちゃんと謝りたい、と言つたあの子を、卑怯者とは呼びたくなかつた。

「謝りたいつて、何？」

亜梨沙が短いため息をこぼした。ふじもんの思いを、鼻で笑うかのように。

「ていうかふじもん、今更ひかりを頼つて来たんだ。ちよつと調子よすぎじゃない？」

「私は、そうは思わない」

「ふーん。ひかりはやさしいんだね。でも、あたしは無理だなー。ふじもんが裏でひかりのこと、なんて言つてたか知ってるし」
黙り込んだ私に、あつ、でもそつかー、と **C** が追い打ちをかける。

「ひかりには、新しいお友達がいるもんね。うちらを切つたところで、たいした影響ないか」

「……え？」

「あたし、知ってるよ。ひかりが最近、高橋さんところこそしてるの。どうせうちらのこととか、べらべら喋ってるんでしょ」

「そんなこと」

「え、じゃあなんですつと隠してたの？ あたしが嫉妬するでも思った？ 亜梨沙に知られたら面倒なことになりそうだから、だから、黙ってようって？」

返す刀で、すっぱりと切られた。何も返せずまごつく私に、あーあ、やっぱりみんな嘘吐きじゃん、と亜梨沙がつぶやく。

「顔合わせてる時だけへらへらして、裏では隠しごとばかり。これだから女子の集団って嫌い。面倒臭い。ほんとと嫌になる」

「……それ、やめて」

「なんで？ みんな言ってるようなことじゃん」

嫌い嫌い嫌い、と亜梨沙が叫んだ。あんた達嫌い。全員嫌い。大っ嫌い。亜梨沙の顔は、私からは見えない。だから、想像するしかない。亜梨沙は今玄関の向こうで、泣きそうな顔をしてるんじゃないか。どうしてか、そう思った。

「友達ごっこ、白々しいんだよ」

亜梨沙が吐き捨てる。

「今更謝られたって、意味ない。あたしは、あの時庇って欲しかった。あの時助けて欲しかったの。あの時のあたしを助けてくれなきゃ、意味ないの。あたしがふじもんにしたことも、一緒だよ。時間は戻せないんだから。あたしは誰も許さないし、許してもらおうとも思っていない。だから絶対、謝らない」

なんで、わかってくれないの。絞り出すようにして口にしたその言葉が、意思に反して³すぎるようなニュアンスを帯びてしまったことに、亜梨沙自身も気づいたのだろう。それをなかったことにするように、もう切るから、と一方的に会話を打ち切った。

「わかったら、どっか行つて。もう二度とあたしにかかわらないで」

亜梨沙がインターホンを切りかけたその時、待つて、と声を上げた。

「お願い。最後にひとつだけ答えて」

このまま続けるべきか、少しだけ迷った。今更言つてなんになる。もしかしたら、全部私の勘違いかもしれない。

「今までのつて、ほんとに亜梨沙の言葉？ 亜梨沙が考えた、亜梨沙自身の言葉？ だったら、仕方ないけど」

「……どういう意味」

亜梨沙の声に微かな震えが混じっているような、そんな気がした。

「ほんと、さーやなんじゃないの」

「え？」

インターホンの向こうで、亜梨沙が息を止めるのがわかった。

「ねえ、答えて。そうなんじゃないの？ 高橋さんのことも、さつき言つたことも全部。さーやから聞いたんじゃないの」⁴

「……だったら、なんなの」

亜梨沙が口にしたいくつかの単語には、聞き覚えがあった。嫉妬。面倒なこと。友達ごっこ。全部、さーやの台詞に似ていた。うん、それだけじゃない。他にも気になることはあった。さーやとふじもんが、急速に距離を縮めたこと。ふじもんがいつからか、私を敵視するようになったこと。

いちばん決定的だったのは、高橋さんのことだ。私と高橋さんがあの河原で会っていることを、他に知る人はいない。あの時偶然河原で顔を合わせた、さーやを除いては。

「私は亜梨沙を面倒くさいなんて思つたこと、ない。時々やんなっちゃうことはあつたとしても、嫌いになることはないと思う。それはほんとだよ。信じてくれなくてもいい。だって、私がそれを知ってるから。さつき亜梨沙が言つたのは、私の言葉じゃなくてさーやの言葉だから」

さーやがどうしてこんなことをしたのかは、わからない。もしかしたら、さーや自身にもわからないのかもしれない。相変異したバツタが、わけもわからず田畑を食い荒らしてしまうように。自分がそうは望んでいなくても、自分の姿形を変えてしまうことだって、きつとあるのだろう。

「さーやじゃなくて、私の言葉を聞いてよ。ねえ、私、どうすればよかった？ 陸上なんてやらなければよかった？ あの時一緒にクラブをやめていればよかった？ 宇手先生のこと、言われた通り無視してればよかった？ 亜梨沙がしてほしかったのつて、亜梨沙が今したことつて、本当にそういうこと？」

亜梨沙は黙つたまま、何も答えない。しばらくの間、沈黙が流れた。長い長い、静寂だった。とその時、インターホンから微かに

物音が聞こえた。亜梨沙が何か言おうとしている。息を潜めて、その続きを待った。

「――る、から」

ガガガッとコンクリートに爪を立てるような激しいノイズが流れて、ブツツと電源の切れる音がした。それを最後に、インターホンの音声は途切れた。それで、終わりだった。あまりにもあつけない。何度ボタンを押しても、結果は同じだった。

『自然界にはそういう現象があるんだって。大勢の仲間達に囲まれて生活すると狂暴化して、体の色とか、翅の長さが変わる生き物がいるの。……相変異したバッタは集団で畑とか田んぼとかを襲って、その土地を食い荒らしちゃう』

私はもう、気づいている。亜梨沙が決して、気が小さく繊細で、傷つきやすいだけの女の子ではないことに。気が小さく、繊細で、傷つきやすいことを理由に人を傷つけることができる、それだけの図々しさを、そこらじゅうの田畑を食い荒らすだけの強かさを手に入れていることに。

あれからずっと、考えていた。一度体の色や翅の長さを変えたバッタは、もう元の姿に戻ることはできないのだろうか。もし戻れないとして、相変異する前のバッタとその後のバッタは、二度とお互いを仲間だとは認識できないのか。

「……ない」

だとしたら、あまりに悲しすぎやしないだろうか。

「私は、バッタじゃない」

踏み出した足を止める。そしてもう一度、確かめるように口にした。そうだ、私は――私達は、バッタじゃない。たとえそうだったとしても、そうじゃない、と言いたい。だって私は、人間だ。空を飛べず、翅の長さも体の色も変えられず、相変異もできない私達は、たくさん仲間に交じっても、あるいはたった一人でいても、自分がどうあるべきかを自分の意志で決めることができる。

こうなったら、あと何十回でも、押してやる。うるさい何時だと思ってるのって、亜梨沙が怒鳴り返してくるまで。そう心に決めて、私は再びインターホンへと向き直った。よし、と一步踏み出し、白いボタンに指が触れたその時、

「……ねえ。今出る、って言ってんじゃない」

ガラガラ、と音がして、玄関の戸が勢いよく開いた。夜の住宅街に、ひどく不機嫌そうな声が響く。

「大体、今何時だと思ってるの？」

私を見つめる怒ったようなその顔が、初めて出会った時みたいだ、と思った。

〔ホモ・サピエンスの相変異〕 こざわたまこ 『教室のゴルディロックスゾーン』より

*1 ちい……………母の再婚相手の連れ子。学童に通っている。

*2 ママハハ……………継母。自分と血のつながっていない母のこと。

*3 六年生の時のこと……………亜梨沙が根も葉もない悪い噂をクラスメイトに立てられた時、噂を否定しなかったこと。

*4 高橋さん……………「私（ひかり）」と最近よく喋るようになったクラスメイト。

問一 } 線部a 「……あたしは悪くない。悪く、ないもん」、 } 線部b 「……ちい、悪くないもん」とありますが、この二つに共通することを説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分にも非があると思い謝罪をしたいと考えているが、どうしたら良いかわからずかたくなに謝らずにいる。
イ 口論の原因となった相手が悪いと思っっているので、相手が謝ってくるまでは謝らないでおこうと思っっている。
ウ 自分に非はないはずなのに、まるで自分だけが悪いかのように言ってくる周囲の人に苛立ちを感じている。
エ 事態が大きくなったことに焦っており、自分は悪くないと暗示をかけることで安心感を得ようとしている。
オ 周囲から怒られるのではないかと不安に思っており、どうすれば自分の正当性を主張できるか悩んでいる。

問二 ―線部1「それが筋でしょう」とありますが、どういふことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 会話の流れからここで謝る必要があるということ。
- イ 年下から謝っていくのが正しい順番だということ。
- ウ 子どもに謝らせるのは保護者の義務だということ。
- エ 突き飛ばした本人が謝るのが道理だということ。
- オ ここでちいが謝れば皆に認められるということ。

問三 ―線部2「私のもとにはついぞ届くことのなかった」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 私がちいを姉だからという理由で甘やかし怒ったことがないので、突然怒り始めた私にちいはびっくりしてしまったから。
- イ 私が林さんに対してしっかりした謝罪をする気配がなかったので、ちいは謝罪をする必要がないと勘違いしてしまったから。
- ウ 私がちいにその場を収めるために謝罪を要求し、ちいの言い分を聞こうとしなかったので、ちいは心を開かなかったから。
- エ 私がちいに、血の繋がった家族ではないという思いから厳しく接しているので、ちいは喋ったら怒られると考えたから。
- オ 私が、子どもを傷つけた件に加え私を傷つけた件でも怒り始めたので、ちいはどうしたらよいかわからなかったから。

問四 本文中の A C に当てはまる言葉として、最も適切なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、記号は一度ずつしか使いません。

- ア 感情や抑揚のない声 イ 金切り声 ウ 震える声
- エ 押し殺すような泣き声 オ 不自然なほど明るい声

問五 ―線部3「すぎるようなニュアンス」とありますが、ここには亜梨沙のどのような思いが表れていますか。「友達」という言葉を必ず用いて、二十字以上三十字内で説明しなさい。

問六 ―線部4「さーやから聞いたんじゃないの」とありますが、さーやが亜梨沙に言った内容と考えられるものとして、ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ひかりは高橋さんと会っていることを何で言ってくれないんだろう。こちらが嫉妬するとも思っているのかな。
- イ ひかりって自分のことあまり喋らないよね。こちらに喋ると面倒なことになりそうとか思っているのかな。
- ウ 高橋さんとひかりが河原で人知れず会っているのを見かけたよ。こちらの悪口でも言っているのかな。
- エ 簡単に縁が切れるうちの友情関係って何だったのだろう。ごっこ遊びみたいなものだったのかな。
- オ 亜梨沙って最近変わったよね。ひかりやふじもんに対してもそうだけど、攻撃的になったと思う。

問七 ―線部5「私は――私達は、バッタじゃない」とありますが、ここには「私」のどのような思いが表れていますか。「相変異したバッタは」という書き出しに続くように五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問八 ―線部6「私を見つめる怒ったようなその顔」とありますが、なぜ亜梨沙は怒ったような顔をしているのですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 非常識な時間に訪ねて来た私に怒りを感じているが、同時に嬉しくもあったので、どのような顔をすれば良いかわからなかったから。

イ 必死に自分に話しかけてくる私の姿を見て、直接話をしてみようという気にはなったが、まだ私の事を許したわけではなかったから。

ウ 自分は悪くないはずなのに、ふじもんへの謝罪を求め亜梨沙だけが悪いかのように言う私に、文句を言ってやろうと考えているから。

エ この場にはいないさーやの話を持ち出し、的外れなことを言う私に、自分を理解してくれていないことへの悲しみと怒りを感じたから。

オ 私に謝罪をして仲直りをしようと考えているが、そのことが相手に伝わるのが照れくさかったので、気持ちをごまかしたかったから。



ここにシールをはってください

受験番号

整理番号

氏名

解答用紙
(50分)

令和六年度 栄東中学校入学試験問題 (国語)

A日程（1月10日）

4	1
5	2
	3

二	
6	1
7	2
8	3
9	4
10	5

[illegible][illegible]